

ハンドブック制作から考えるこれからの学生支援

佐藤 枝里^{*1}

要 旨

中部大学学生相談室は教職員を対象に学生支援のために2冊のハンドブックとDVDを制作してきた。その制作過程と内容の変遷を考察したところ、学生層の多様化だけでなく、制作時の学生支援体制、学生支援に対する学内理解度、大学教育への社会からの期待が関連していることが推測された。今後、高大連携による入学前教育の強化やリスクリング拠点としての大学の在り方など、社会からの大学教育への要望の多様化が予測され、入学予定の高校生、社会人学生や高齢学生、留学生へと支援対象の拡大の可能性が推測される。家族の役割も変容を遂げ、大学生の子どもを持つ親・家族を対象としたハンドブックも必要となるかもしれない。教職員側の多様性が進む可能性もあり、学生相談室から発信される知見も様々な障害特性に配慮した情報バリアフリーの充実が期待されることになるのではないだろうか。

キーワード

学生相談 学生支援ハンドブック 大学教育支援 多様性

1 はじめに

中部大学学生相談室では相談業務の主軸となる学生を対象とした個別面接に加え、①学科必須科目1単元「社会生活の基礎・大学生の対人関係」の出前授業、②UPI学生精神的健康調査を含む調査の実施とハイリスク学生の呼出面接、③相談員の研修を受けた上級生サポーターによる一人暮らし学生対象のグループの運営や、自己理解他者理解を促す心理教育グループの開催を通して多層的な支援をしてきた（佐藤，2023a）。

近年の学生相談室の利用件数は5年前の約2倍に達し、学生をめぐる教職員や学生の親・家族を対象としたコンサルテーション件数が相談件数の25.3%を占めている（佐藤・渡邊，2022）。2000年来、非常勤カウンセラーの勤務日数を増やすことにより堅固な相談体制が組織され（谷口，2018）、教職員の学生支援力の増強のため定期的にFD・SD活動が開催されてきた（渡邊・佐藤，2021；佐藤・渡邊，2022）。

本学の学生相談室は1968年に専任カウンセラーが採用されて開室し、「相談室のある大学が珍しい時代に画期的な試み」（桐山，2018）とされていた。専任が配置されていた期間は短く、学外から週1日非常勤カウンセラーを招いて開室する期間が長く続いたが、その後1995年に専任カウンセラーが教員として再配置され、再出発の時を迎えた。

学生相談室の支援体制が整備されるに伴い、相談業

務から得られた知見を、授業や課外活動で学生対応の最前線にいる教職員の学生支援に活かす取り組みを模索してきた。2006年には、冊子『教職員のための学生と向き合う25の提案—こんなとき、あなたは どうしますか？—』（中部大学・教育を考える研究会編）が発行され、2012年には、DVDと冊子『アスペルガー症候群の学生を理解し支援するために』（中部大学学生相談室編）が制作された。その後10数年を経て、学生層の多様性、教育観の変化、社会の多様性の流れのなか、今日の学生支援の実際に合わせて『学生支援ハンドブック—学生の困ったに効く21の提案』（中部大学学生相談室編，2023）を作成するに至った。

本研究では、これまで学生相談室が制作してきた学生支援の冊子2冊とDVDを取り上げ、その制作過程と取り上げられた項目の変遷から、今後本学学生相談室に求められる支援について考察することを目的とした。

2 2006年制作『こんなときどうする？学生と向き合う25の提案』の制作理念：内容と課題

2.1 学生相談室体制

専任カウンセラーが再配置された1995年からの5年間で、相談件数、学内認知度が上がり、2000年に非常勤カウンセラーの採用が実現することで、面接業務においての協働が可能となった。相談体制の拡充により、

*1 教育戦略部門 学生相談室 教授

健康な学生への発達支援、学生相談室から大学への発信、保護者面接など活動の幅を広げることも達成された。専任カウンセラーの配置は依然1人であったため、学内の志を同じくする教職員とチームを組むことで様々な学生支援を試み、恵那オリエンテーションガイドブックの作成、中部大学・教育を考える研究会の立ち上げ、レッツ・チャレンジの作成に加えて、『こんなときどうする？学生と向き合う25の提案（以下、『25の提案』と記す）』が制作された（桐山，2018）。

「中部大学・教育を考える研究会」メンバーの、学生相談、スポーツ、数学、法律を専門とする4名の教員で冊子制作の構想が練られ、誰もがよく出会う事例として精選された25項目を学生相談室カウンセラーが執筆した。中部大学学長裁量研究費による研究「中部大学の教育を考える一知・情・意の融合的教育を目指して」の一環として作成された。

専任カウンセラー1名体制で相談機関を運営しながら、学生の成長を願う志を同じくした教員で研究会チームを編成し、学生対応時の教員の困り感を明確にしたうえで冊子制作は、本学学生相談室の在り方として組織開発の面からも意味深いものがあると考えられた。

2.2 理念

2006年に出版された『25の提案』は、4章構成、B5判、全71頁で編集された（図1）。

第1章「こんなとき、あなたは どうしますか？」、第2章「学生の話聞く」、第3章「学生たちは話を聞いてくれる人を求めている—アンケート調査の結果から—」からなる（表1）。学生の気になる行動25項目に対する対応の選択肢がクイズ仕立てで提示され、読者自身に対応の振り返りを求めたのちに考察を加えていくという遊び心溢れる構成となっている。

第1章「こんなとき、あなたは どうしますか？」で取り上げられた25項目を精査すると、「学生対応の基本姿勢」を基軸としながら、自身の学生観、人間観を再考、再確認、直面させるものがあることに気づかされる。「こんなとき、『あなたは』 どうしますか？」という書名のとおり、読者である大学人の「あなた」に問題提起を迫り、学生対応の在り方を内省させ、対峙させる重さと厳しさが感じられる。だからこそ、遊び心を喚起させるクイズ仕立てを取り入れ、軽やかに明るく取り組んでもらう仕掛けが必要だったのではないだろうか。

25項目を読み進めると、「(7) 言いたいことがはっきり言えない学生と接するとき」「(21) 友だちのいない学生が気になるとき」といった「緊急性は低いが今後の学生の心理的成長について考えさせられるもの」から、「(9) SOSに気づいたとき」「(10) 自殺したい、



図1 『25の提案』表紙

表1 『25の提案』目次

1	こんなとき、あなたは どうしますか？
1	学生の相談にすぐ答えを出せないとき
2	何か変だな？と思ったとき
3	学生が突然忙しい時間に訪れたとき
4	小さなノックの音がしたとき
5	態度の悪い学生と向きあうとき
6	学生が突然泣き出したとき
7	言いたいことがはっきり言えない学生と接するとき
8	異性の学生の相談を受けるとき
9	SOSに気づいたとき
10	自殺したい、死にたいという学生と向き合うとき
11	自信のない学生を励ましたいとき
12	ほめるところのない学生をほめたいとき
13	成績不振に悩む学生と接するとき
14	単位が欲しいとせがまれたとき
15	大学での目標を失った学生と接するとき
16	他の先生の講義について質問・相談を受けたとき
17	呼び出しに応じない学生に困ったとき
18	学生が退学したいと相談にきたとき
19	退学届けに印を求められたとき
20	学生が就職のことで相談に来たとき
21	友だちのいない学生が気になるとき
22	歩きたばこの学生を見かけたとき
23	気になる学生を学生相談室に行かせたいとき
24	学生相談室を勧めることにためらいがあるとき
25	外見でついつい判断したくなるとき
2	学生の話聞く
3	学生たちは話を聞いてくれる人を求めている—アンケート調査の結果から—

死にたいという学生と向き合うとき」といった「緊急性が高く適切な判断を持った危機対応を要するもの」まで、発達支援的な内容のものから緊急対応までを網羅していることがわかる。

第1章の最初の項目である「(1) 学生の相談にすぐ答えを出せないとき」は、以下の問いかけから始まっている（図2）。

「最近相談内容も複雑になり、深刻な問題を抱え

て、クリニックに通いながら授業に通っている学生も少なくありません。家族関係も複雑で、相談されてもどう対応していいかわからない場合があります。そんなとき、あなたは「どうしますか」という投げかけがされ、続いて以下の4つの選択肢が示される。

- ①「頑張れ。あなたならできる」と肯定的に励ます。
- ②自分にはわからないので他に相談に行くように伝える。
- ③何かよい助言ができないかと知恵をしぼる。
- ④とりあえず話を聞く。



図2 『25の提案』のレイアウト

「とりあえず学生の話をしっかり聞いてほしい」というメッセージを巻頭に掲載していることから、『25の提案』制作の目的が、大学人として学生と向き合うときの基本姿勢（学生の声に耳を傾けること）を広く学内に示すことであることが読み取れる。

続く第2章「学生話を聞く」では、受容と共感、傾聴をはじめとするカウンセリングの基礎知識、学生話を聞くことの教育的意義が記されている。読み進めるうちに、第1章でのクイズ仕立ての「問い」の背景にある学生支援、学生相談の神髄に至るという流れとなっている。

『25の提案』が制作された翌年の2007年に、日本学生支援機構から出された報告書「大学における学生相談体制の充実方策について」において学生支援の3階層モデルが提示され、「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」についての提言がされた。学内支援の方向性が全国的に明示される前に、冊子制作を通して、学生相談の理念、すなわち「対象となる学生一人ひとりが自己を理解し、コントロールし、自分らしい社会への巣立ち方を選択できるよう『個』としての主体を育てることにある」（高石、2020）という理念を示し、学生の心理的成長のために教職で協働しようというメッセージが発信されていたことは大変意義深い。学生支援という主題を通して深

淵なる理念が披露され、多くの問題が提起された1冊となっている。

2.3 課題

『25の提案』は、学内配布やFD・SDの参考テキストとして使用されただけでなく、全国他大学のFDSDでも広く用いられた。他大学からの引き合いに応じて増刷し、発行部数は12,000部に至った。

出版から年月を重ねるなかで、発達障害やその傾向のある学生への支援を必要とする場面が報告されるようになってきた。学生をめぐるコンサルテーションのために来室した教職員から、対応の難しい事案についての項目を追加してほしいとハンドブックの続編を望む声が上がってきた。

3 2012年制作DVD『アスペルガー症候群の学生を理解し支援するために』の制作理念：内容と課題

3.1 学生相談室体制

学生相談室の来談学生数はますます増加し、発達障害、引きこもり、退学、ハラスメント等、相談内容も深刻なケースが目立つようになっていった。2004年制定の発達障害者支援法と2016年の発達障害支援法一部改正を前に、本学でも発達障害学生やその傾向のある学生の理解と適切な対応が求められるようになり、視聴覚資料制作への機運の高まりが感じられるようになってきた。

2007年に専任カウンセラー2名と専任事務職員1名での相談体制が構築されてから5年を経て、DVD『アスペルガー症候群の学生を理解し支援するために』（以下、DVDと記す）が制作されることとなった（図3）。

制作企画は、専任カウンセラー2名に加えて、学生相談において連携をしてきた心理学科教員、学部事務室職員の4名で行った。学生対応の最前線にいる学科教員と学生支援課（当時は学生課）職員、学部事務室職員を対象に「よくあるケース」を収集するためにカウンセラーが聞き取り調査を行った。その結果、「講義場面」「呼出面接場面」「窓口対応場面」での教職員の困り感を取り上げ、解決のヒントが求められていることが明らかになった。

発達障害の学生の様子とその対応を、大学での「よくあるケース」としてドラマ化して映像で表現するために、学内関係部署スタッフの協力を得て協働制作することとなった。撮影から細かい編集に至るまでの作業を学内メディア教育担当部署職員に依頼した。教員2名と学生支援部署職員1名、そして、学内演劇部学生3名に出演要請をした。

学生対応の「よくあるケース」の映像化だったこと

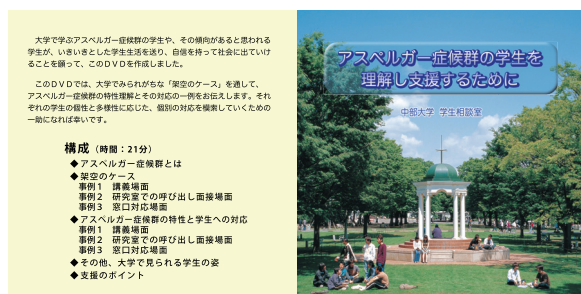


図3 DVD『アスペルガー症候群の学生を理解し支援するために』ジャケット表紙・裏表紙

もあり、各人の経験を生かした独自の役作りがなされ、完成後には視聴者から「プロの役者を起用したのか」との問い合わせを受けるほどの完成度が得られた。演劇部員の役作りには、当時TV放映されていた発達障害の傾向のありそうな主人公が活躍する人気ドラマ視聴の勧めが大いに役に立ち、こちらも「当事者を起用したのか」との問い合わせを受けたほどであった。

情報の可視化のためのDVD挿絵は、フリーのカットは使わずにイラストの得意な学生に描き起こしを依頼した。制作資金は、2012年度の中部大学特別研究費CP（学内競争的研究費）を獲得し、学内の協働制作となった。

3.2 理念

映像資料を基に、アスペルガー症候群に関する解説と学修面及び生活面からの支援のありかたの提示を通して、学生相談室から以下の思いを発信したいと考えた。

まず第1に、当時まだ理解が得られていなかった発達障害やその傾向のある学生の障害特性を理解したうえで、彼らの肯定的な面に注目し適切な対応をすることで、可能性を伸ばすことができると言われていることを伝えたいと考えた。

第2に、発達障害の学生への関わり方の基本姿勢は、健康な学生への支援の在り方にも通じるものであることを周知したいと考えた。そこで、支援のポイントとして、英国自閉症協会によるSPELLという関わり方の基本姿勢を取り上げた。SPELLとは、枠組みをもって対応するという構造化（StructureのS）、肯定的に接すること（PositiveのP）、その人独自の考え方を受け止める、共感すること（EmpathyのE）、ストレスや不安を与えず低刺激を図ること（Low arousalのL）、関わる多くの人・機関と連携すること（LinksのL）の頭文字である。こうした関わり方の基本姿勢は、実は学生支援の基本でもあるということを明記した。

3.3 課題

制作当時在学していたアスペルガー症候群やその傾向のある学生とは学業面での問題がほとんどなかったことから、DVDの主眼は、彼らの特性や教職員側の具体的な情報伝達方法の周知におかれていた。

当時はまだ限局性学習障害の学生は極めて少数派であったため、学習障害学生への支援を取り上げることはなかった。学習に困難を感じる彼らの支援については、熱心な指導教員との関係性においてか、若しくは熱心な指導教員に連れてこられた学生相談室において、その人らしい進路を共に考え、思うように学べない悔しさや不条理を聞くという形での支援として展開されていた。

4 昨今の学生支援の実情

上掲DVD制作から10年が経ち、コロナ禍以降、学生からの相談内容も「心身健康」が増加し、ストレスが身体化するケースがより顕著となってきた（佐藤・渡邊, 2022）。学生生活上のさまざまなリスク予防（カルト問題やハラスメント防止）が求められ、学科必修科目「スタートアップセミナー」参考テキストにも改訂が加えられていった（中部大学人間力創成教育院初年次教育プログラム編, 2022）。コロナ禍の影響もあってか、対人距離の持ち方の困難さからくる対人関係の諸問題や自死の問題といった危機に直面する学生の理解と対応の知識も必要となってきた。

また、学生相談室の利用者数、面接件数が10年前の約2倍に増加し、教職員と親・家族を対象とするコンサルテーション業務が全利用者数、全面接件数ともに業務の約3割を占めることが常態化するようになってきた（佐藤・渡邊, 2022）。教職員が「気になる学生」を見逃さず、丁寧な対応をしていることの裏付けでもあるが、学生相談室の人的資源、マンパワーにも限界がある。学生相談室から、教職員が学生対応の際に心得ておくとい点、留意点を可視化し発信することで、より適切な支援に繋がるのではないかと考えた。

5 『学生支援ハンドブッケー学生の困ったに効く21の提案』の制作理念：内容と課題

5.1 学生相談体制

2022年度の学生相談室は、専任カウンセラー2名と専任事務職員1名、非常勤カウンセラー5名が週1日勤務するという体制で運営されていた。本学の非常勤カウンセラーは授業経験を有しており、非常勤講師として採用されている。

冊子制作にあたり、学生相談室の構成員である5名のカウンセラーに加えて、前職が学生相談部署であった学部教員5名にも執筆を依頼した。授業担当者及び

支援者としての経験を有するメンバーからの言葉を集約した冊子となった。

5.2 理念

本学で『25の提案』が制作されて以降、大学生を対象とした支援ハンドブックが全国の学生相談室で制作されるようになった。18歳人口減少問題を背景に、多様な学生を受け入れることになった大学で、学生支援が大きな課題となったことの証左と言えよう。

『学生支援ハンドブック』では、巻頭に表記法についての見解を記す必要があった。2022年度より民法改正により成年年齢が18歳に引き下げられたことを受けたことや、親のいない学生も在学していることから、「保護者」「保証人」でなく「家族」という表記を用いた。また、本学における学生支援に関する指針や対外的広報では「障がい」が用いられているが、参考文献や資料では「障害」が用いられていることが多く、表記の混在による読みにくさを回避するために「障害」で統一した。「聞く」「聴く」「きく」という様々な表記法があり、文中では「聞く」で統一したが、「学生の話をよく聞くことは教育的効果がある」という理念からタイトルに「効く」という文字を用いた。

急激な社会情勢の変化を受け、学生支援が複雑化困難化するなか、入学時から丁寧な支援が必要となる発達障害学生支援や性的違和をはじめとする新しい人権、ハラスメント防止、親対応といった視点が不可欠となり、改訂版においてはこれらの諸項目を盛り込む必要があった（佐藤，2023b）。

4章構成で、「学生に寄り添うために」で理念を、「学ぶ力を伸ばす」で学業支援を、「心の危機と向き合う」「問題解決のために」で学生の心理的危機とその対応を扱い、事例を精選した（図4）。

学生支援の最前線にいる教職員が欲する情報をいかにわかりやすく伝えるかを考え、1項目を見開き2頁で扱うこと、対人関係・対人支援は「絶対正解」が得難い領域であるものの何らかの糸口・ヒントの提供となること、視覚的にわかりやすく直感的に理解しやすいことを考慮した（図5）。

2019年に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」（読書バリアフリー法）が制定され、障害の有無に関わらず全ての国民が等しく読書を通じて文字・活字文化の恵沢を享受することができる社会の実現が求められている。学生相談室が制作する資料も、文字の大きさやフォントなどの「読みやすさ」と、情報提供の仕方が左右する「わかりやすさ」を軸に検討が加えられた。

配色は、黒を基調にオレンジ色を用いた二色刷りとした。強い印象を持つフォントであるゴシック体で繊

目次	
第1章 学生に寄り添うために	5
1. 学生が相談に来たとき	6
2. 学生が何もしゃべりません	8
3. 発達に課題のある学生が気になります	10
4. 障害を認めない学生がいます	12
5. 性のありかたについて悩んでいる学生がいます	14
6. 「就職活動がうまくいきません」と言われました	16
7. 気になる学生に学生相談室を勧めたいとき	18
コラム1 学生生活サイクルの特徴	20
第2章 学ぶ力を伸ばす	24
8. 学生と連絡が取れずに困っています	22
9. 課題を出してくれません	24
10. 欠席の多い学生が気になります	26
11. 「大学をやめたい」と言われました	28
12. 「大学に行けません」と言われました	30
コラム2 「質問がない」背景とその対応	32
第3章 心の危機と向き合う	33
13. 授業中に予期しない行動をとる学生がいます	34
14. 「死にたい」と言われました	36
15. 「家に帰りたい」と言われました	38
16. ひとりぼっちでいる学生が気になります	40
17. 学生が亡くなりました	42
コラム3 学生のうつ状態に気付くためのヒント	44
第4章 問題解決のために	45
18. 学生同士のトラブルについて相談を受けました	46
19. 他の先生とのことで相談を受けました	48
20. 学生から「ハラスメントだ」と言われて戸惑っています	50
21. 学生の家族から苦情がきました	52
コラム4 アサーティブに伝える7つのステップ	54
付録 学生支援連携フローチャート	55
1. 学生相談室との連携	56
2. 合理的配慮申請から実施までの流れ	57
3. 緊急時（問題行動を含む事件・事故）の対応	58
引用文献	60
あとがき	62
執筆者一覧	63

図4 『学生支援ハンドブック』目次

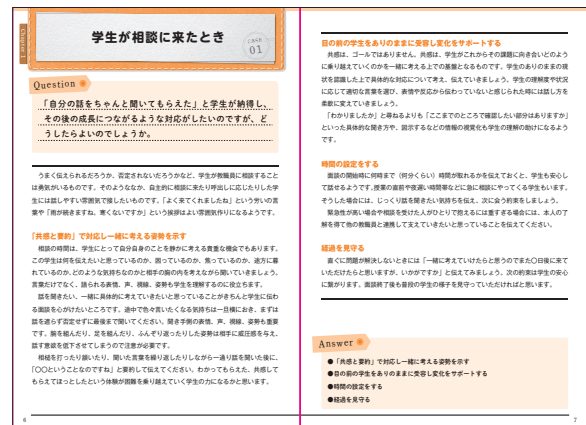


図5 『学生支援ハンドブック』レイアウト

細な内容を表記した。

ケース1では、「学生が相談に来たとき」の対応を示している。「『自分の話をちゃんと聞いてもらえた』と学生が納得しその後の成長につながるような対応がしたいのですが、どうしたらよいのでしょうか」という質問が記され、対応ポイントを太字のオレンジ色で明記している。時間に余裕がないときや内容を概観したいときに、太字部分を読むことでヒントが得られるようレイアウトされた。

『アスペルガーDVD』で、発達障害やその傾向のある学生に対して、図示したり可視化したりすると情報伝達がしやすくなる旨を記したが、『学生支援ハンドブック』でも学内連携の手順をチャートにして掲載した。学生支援課と合理的配慮の申請窓口を有する学生支援部署スタッフの現場の経験値をもとにチャートが制作された（図6）。

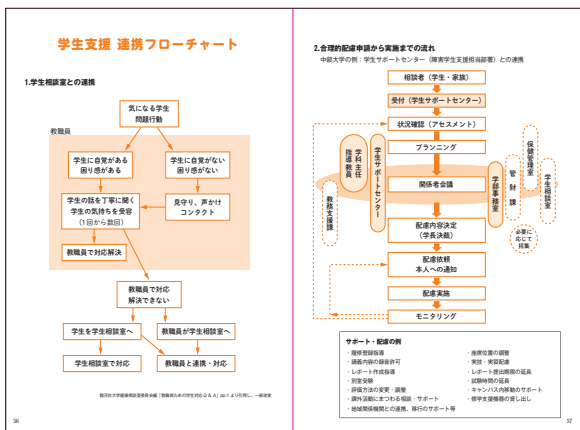


図6 学生支援 連携フローチャート

冊子のもつ五感情報にも臨床的な意味があり、大切にしたいと考えた。そこで、冊子の表紙絵制作は、2017年に本学で開催された日本学生相談学会第35回大会（大会委員長桐山雅子名誉教授）のプログラム及び論文抄録集表紙イラストを担当した芸術療法を専門とする南山大学人文学部心理学科教員伊東留美氏に依頼した。

分担執筆者および学生相談室事務スタッフに対して、『私にとって、学生相談室はこんな場所です』という皆さまのイメージを「もの」「かたち」「いろ」などで教えてください』との質問項目が課された（伊東，2023）。学生相談室から連想されるイメージが、「ことば」もしくは「ことばの補助的表現としてのイラスト」として求められ、集められた素材から表紙絵デザインが完成した（図7）。日常から暫し離れて「自分の持つ学生相談のイメージとはどういうものなのか」をイ



図7 『学生支援ハンドブック』表紙

メージする時間は、芸術療法的な時間であったと言えよう。

表紙絵はパステルを用いた柔らかなタッチで描かれ、印刷会社のイラストレーターがタイトルの「ハンドブック」から連想したミシン目の入ったフックが描かれ、生命を育む大地、基盤となる土壌、土をイメージした茶色が用いられた。紙媒体に記されたメッセージを挟み込む表紙両面は優しく穏やかな印象に仕上げることで、ゴシック体を黒とオレンジの二色刷りで表記するメッセージ性の強さとのバランスを取りたいという思いは、表紙の完成によって達成された。

6 考察

中部大学学生相談室が教職員を対象に学生支援のために制作してきた2冊のハンドブックとDVDを、その制作過程と内容の変遷の軸から検討したところ、学生層の多様化だけでなく、制作時の学生支援体制、学生支援に対する学内理解度、大学教育への社会からの期待が関連していることが考察された。

『学生支援ハンドブック』の内容は、『25の提案』で扱われた健康な学生を含む学生支援の一般から、発達障害やその傾向のある学生の理解と支援のために制作された『アスペルガーDVD』を経て、より多様な学生対応に言及する内容へと変遷を遂げてきている。

今後、高大連携、入学前教育強化の要請から、入学前の進学予定高校生や、リスクリリング拠点の大学として社会人・高齢学生、留学生へと支援対象の拡大が推測される。また、IT技術革新により「学びの意義」も受け入れる学生も多様化が進むことが見込まれる。家族の在り方・役割も大きく変化しつつ、大学生の子どもを持つ親・家族を対象としたハンドブック制作を要望する声さえある。

教職員側の多様性が進む可能性も考えられる。「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律（読書バリアフリー法）」（2019年制定）に基づいて、学生相談室から発信される情報も伝達方法のバリアフリー化が期待されることが推察された。

新しい人権といった法律面の変化だけでなく、これまでにない急速な変化を受けて、新しい体験や新しい感覚を持つ若者が大学に入学することになろう。個々の学生のもつ特性や独自性を汲み取りながら、学生の心理的成長の促進を可能にする学生支援の在り方を模索し発信していくことが強く求められている。

引用文献

中部大学学生部学生相談室編 2023 学生支援ハンド
ブッカー学生の困ったに効く21の提案一.

中部大学学生相談室編 2012 アスペルガー症候群の

- 学生を理解し支援するために（DVD資料）。
- 中部大学教育を考える研究会編 2006 教職員のための
の学生と向き合う25の提案—こんなとき、あなたは
どうしますか？—。風媒社。
- 中部大学人間力創成総合教育センター初年次教育プロ
グラム編 2022 大学で学ぶスタートアップセミナー
参考テキスト2022。KNS出版。
- 独立行政法人日本学生支援機構学生生活部 2007 大
学における学生相談体制の充実方策について—「総
合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・
協働」—。 [https://www.jasso.go.jp/gakusei/
publication/__icsFiles/afieldfile/2021/02/12/
jyujitsuhausaku_2.pdf](https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/__icsFiles/afieldfile/2021/02/12/jyujitsuhausaku_2.pdf)（2023年9月10日取得）
- 伊東留美 2023 表紙絵について。学生支援ハンドブッ
ク—学生の困ったに効く21の提案—, 64.
- 桐山雅子 2018 中部大学学生相談室の歴史。中部大
学学生相談室活動報告書, 1, 5-12.
- 文部科学省 2019視覚障害者等の読書環境の整備の推
進に関する法律について
[https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/
gakusyushien/1421441.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/1421441.htm)（2023年9月10日取得）
- 佐藤枝里・渡邊素子 2022 2020年度（令和2年度）
学生相談室利用状況。中部大学学生相談室活動報告
書, 4, 25-39.
- 佐藤枝里 2023a 初年次教育科目における心理教育—
学生相談の視点から—。中部大学リベラルアーツ論
集, 5, 90-102.
- 佐藤枝里 2023b 学生相談業務で得られた知見を初
年次学生支援の実際に活かす—学生支援冊子に内容
改訂から支援の変遷を考える—。初年次教育学会第
16回大会発表要旨集, 72-73.
- 高石恭子 2020 学生相談という場—ニッチから多様
性という価値の実現に向けて—。現代思想10,154-1
62.
- 谷口洋子 2018 構造の変化に伴う相談の内容と関係
性の変遷—18年間の実践からの考察—。中部大学学
生相談室活動報告書, 1, 13-20.
- 渡邊素子・佐藤枝里 2021 2019年度（令和元年度）
学生相談室利用状況。中部大学学生相談室活動報告
書, 3, 39-51.

Future Student Support from the Handbook Production

SATO Eri*¹

*1 Professor, Student Counseling Room, Chubu University

Abstract

Chubu University's Student Counseling Room has produced two handbooks and a DVD for student support for faculty and staff. The process of production and changes in the contents of the handbooks and DVD were examined, and it was inferred that they are related not only to the diversification of the student population, but also to the student support system at the time of production, the level of understanding of student support within the university, and societal expectations of university education. In the future, it is predicted that society's demands for university education will diversify, such as strengthening pre-entrance education through high school-university cooperation and the role of universities as reskilling centers, and it is speculated that the scope of support will expand to include prospective high school students, working students, elderly students, and international students. The role of the family will also undergo a transformation, and a handbook targeting parents and families with children of college students may become necessary. The diversity on the faculty and staff side may increase, and it may be expected that the information transmitted by the Student Counseling Room will also become barrier-free in the way it is communicated.

Key words

Student Counseling, Student Support Handbook, University Education, Diversity